昭和五十七年三月三十一日　岐阜県職員を退職何とか元気なうちに現地へ訪れて犠牲者の冥福を祈りたいと念願しているが、今もその務めは果たせず残念でならない。申し訳ない気持ちでいっぱいであります。

抑留記

岐阜県　安田英夫

生年月日　大正十四（一九二五）年二月六日
本　籍　岐阜県恵那市長島町永田
本籍地で生まれ長島小学校卒業
家業（農業）

軍　歴

昭和十九（一九四四）年徴兵検査。二十年二月、中部五九部隊（和歌山県加太）入隊。三日目に軍服新品（冬服）を着せられ地下足袋姿にて九州の博多より釜山へ。途中にアメリカの潜水艦がいるらしいと、エンジンを止めて何分か海の上に浮かんで危険が去るまでそのままでいたように思います。

満州へ入り、どんどん北へ行き、北満の孫呉というところへ着き、軍隊生活が始まりました。

我々が二月に孫呉へ入隊した当時は南方へ主力部隊が出動した後で、南方では馬は必要ないため部隊は馬ばかりで、中隊ではわずかの兵士でした。我々が二月に入隊、五月に在満の召集兵と韓国の現役兵が入隊して、兵器を受け取って部隊を編成して一五二〇五部隊となり、部隊は陣地を作るために荒神山（部隊がつけた）へ。部隊には勤務兵（炊事、馬の管理、歩哨など）少数が残り、俺も歩哨下番、うまやの連続であったが、たまたま寝わらの受取りに出かけていると飛行機が飛んで来た。聞き慣れない音である。空を見上げると日本の日の丸がない飛行機である。すると週番士官が、敵機飛来、すぐ中隊へ戻れと言われ、戻る

と、各中隊一人ずつ水道山の警備につけの命令により水道山へ。警備を終えて帰ったら、中隊の荷物は何もなく、全部陣地へ運び兵舎に火をつけて山へ登る。

終戦の詔勅は聞かないが、司令部より週番士官が受領して我々に伝えたと思う。

武装解除も司令部の命令であった。

焼けた部隊跡に戻り、半地階の穴を掘り生活をする。

抑留歴

我々砲兵隊は新しく病弱者を残して一個中隊二百人で五個中隊を編成、孫呉より黒河まで行軍して船に乗りブラゴエシチェンスクへ。そこで野営して貨物列車に乗りセレトカン駅で下車、越冬の支度に取りかかる（半地下の穴蔵で、板がないのですべて丸太造りである）。

約一カ月くらい農場のバレイショ掘りであったが、おかげで腹はいつも満腹であった。我々中隊は駅にて材木の積み込みをやり、ほかの四個中隊は山で木材の切り出しである。一冬セレトカンで、翌年暖かになるころまた行軍で次の駅ペトローシという駅に着き、その部隊と合流してハバロフスクまでBK（アメリカ車）にて。ウスリー河のほとり、れんが造りで外回りだけの建物があり、付近でテントにて生活しながらその建物を造る者、郊外へ出る者。たしか二〇ラーゲルと呼んでいたと思う。

階級制度に嫌気がさして転属を希望して第七ラーゲルに行きれんが積みをする。

すぐそばに日本の将官の方々が入所している建物があったが、姿は一度も見たことはなかった。

建物が完成に近づくころダモイの話が聞こえてくるようになり、新品のロシア製の服と新品の靴が渡され、シベリア鉄道に乗りナホトカへ。三日ほどにて恵山丸に乗船でき、夢に見た日本に到着する。実に三年と十カ月の抑留生活でした。

振り返ってみると、苦しい事もいやな事もすべて夢のようであります。今の幸福を思うとき、現

地に残してきた戦友たちの墓参りをしたいと思いますが、体が思うようにならず、その思いが実現できずにおります。せめて地元の行事にだけは参加することにしております。

抑留記

岐阜県　千邑　章
（旧姓　丹羽）

生年月日　大正十二（一九二三）年五月十三日
本　籍　岐阜県恵那郡武並村藤
軍　歴
昭和十九（一九四四）年三月二十日
二等兵　第一一国境守備隊入隊
昭和二十年三月二十二日　上等兵
〃　九月九日
海林第一三三作業大隊に編入
抑留歴
昭和二十年十月上旬
海林よりグロデコウに移動
〃　十月中旬
グロデコウよりタイシェットに移動
〃　十月下旬
タイシェット九二ラーゲルから二七八ラーゲルの間を移動

抑留中は主として鉄道工事に従事した。第二シベリア鉄道の建設でした。この地区の犠牲者は枕木一本に日本人一人が死んだと言われている。何のためにこのような苦しみを受けたのか、私どもにはどうしても納得できません。

職　歴　農業

抑留記

岐阜県　各務松茂

生年月日　大正十三（一九二四）年五月十四日